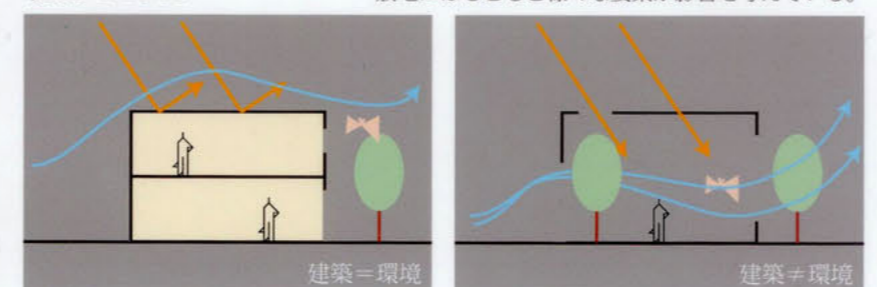
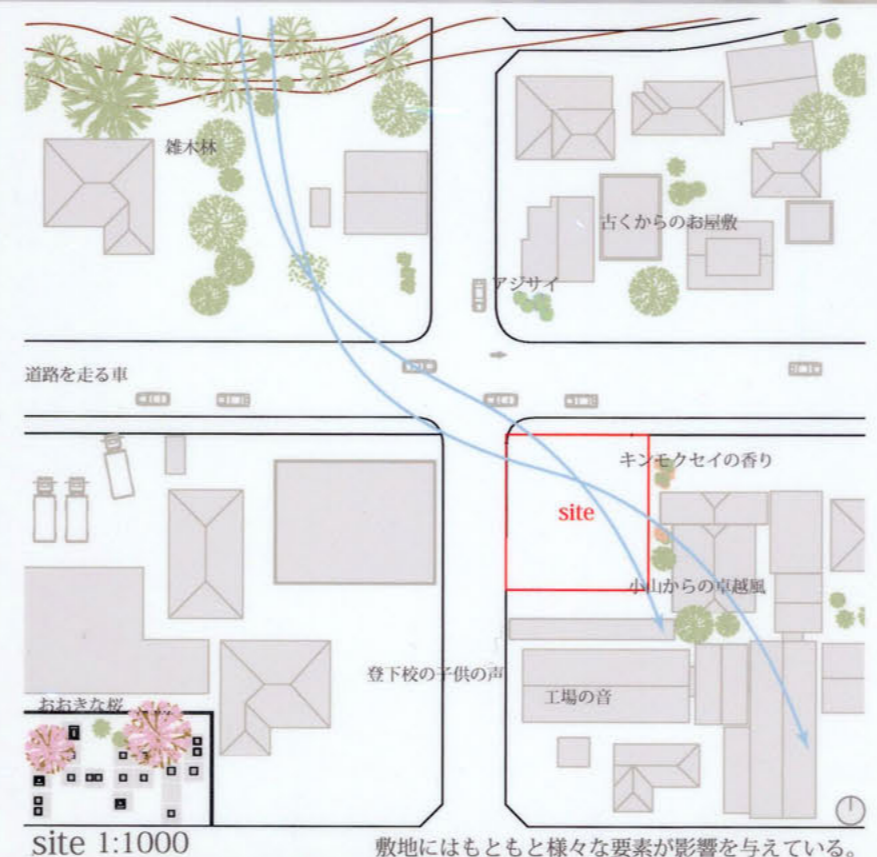


トリミングハウス

環境という大きな括りのなかで、自然・建築・人を同じように考える。これからの地方都市では、大きな環境を敷地にできるという希望を感じる。

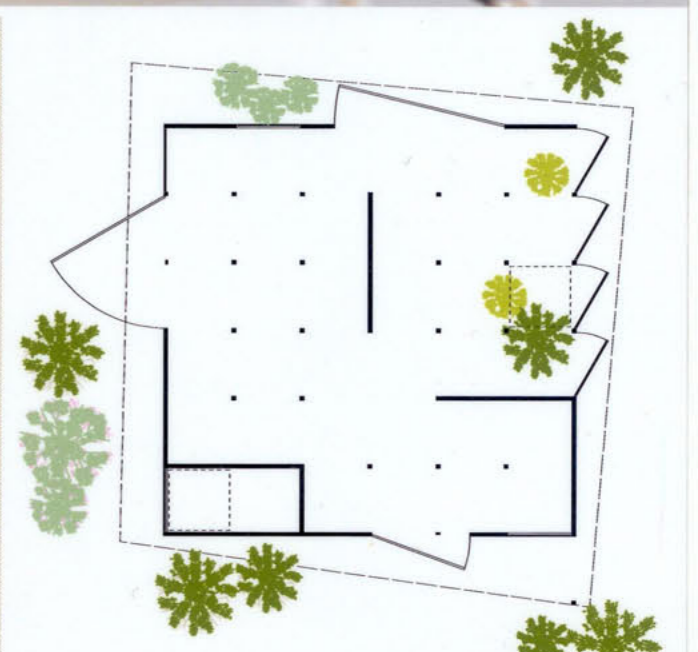
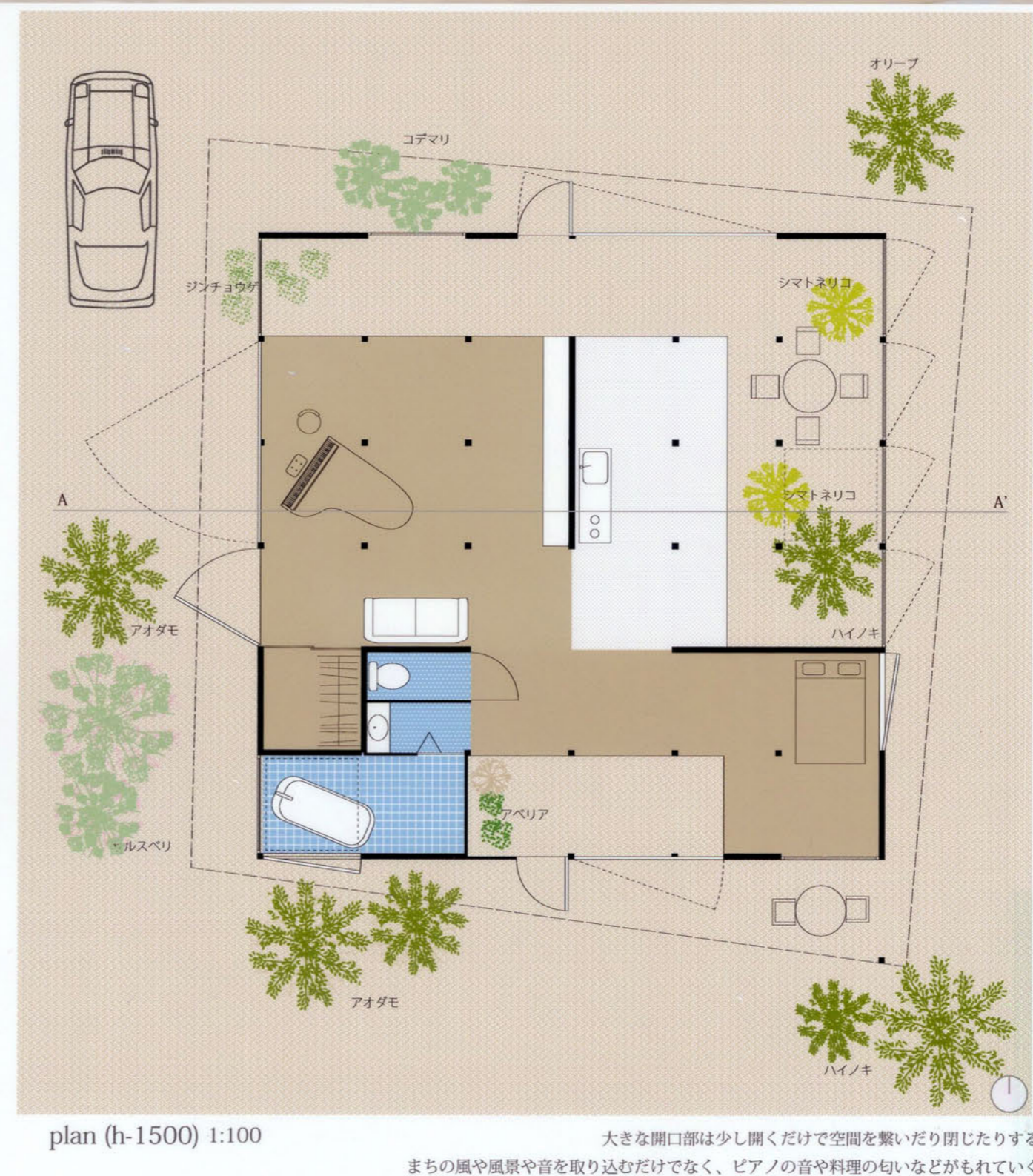
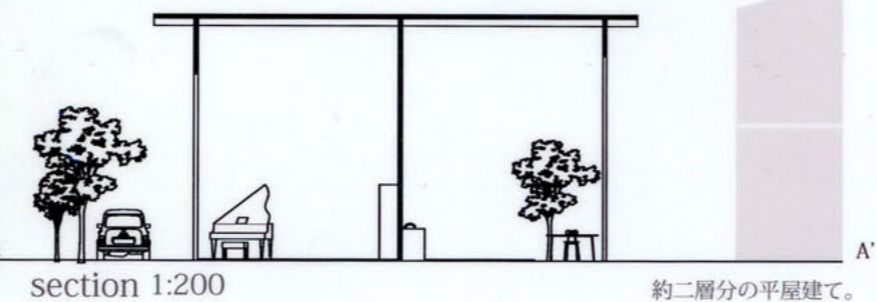
敷地という環境にそっと置かれる、せいぜいの高い平屋では、外と同じように光が降りそそぎ、風がぬけ、人と自然はもはや同等である。

建築が環境を作るのではなく、環境を切り取るような建築。



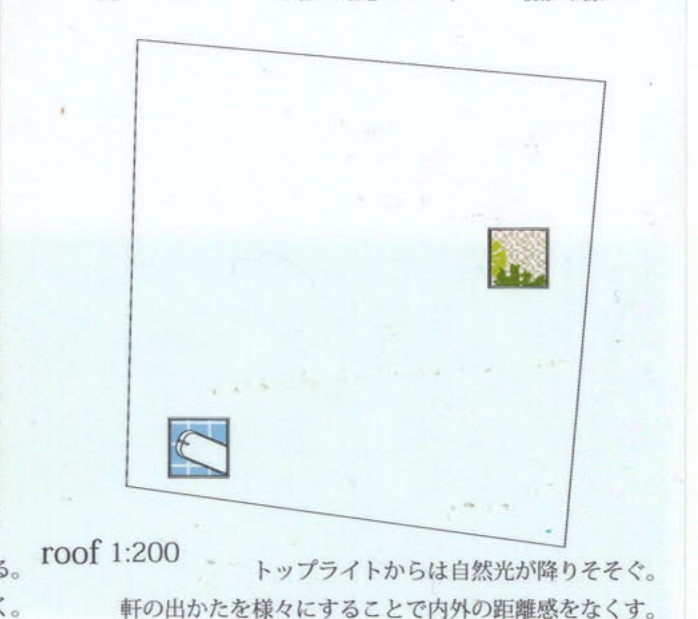
敷地にはもともと様々な要素が影響を与えている。

これまでの住宅は徹底したヒューマンスケールによって「人のための環境」を目指してきた。建築をスケールアウトさせることで内外の関係を曖昧にし、ありのままの環境を切り取るものとして考える。

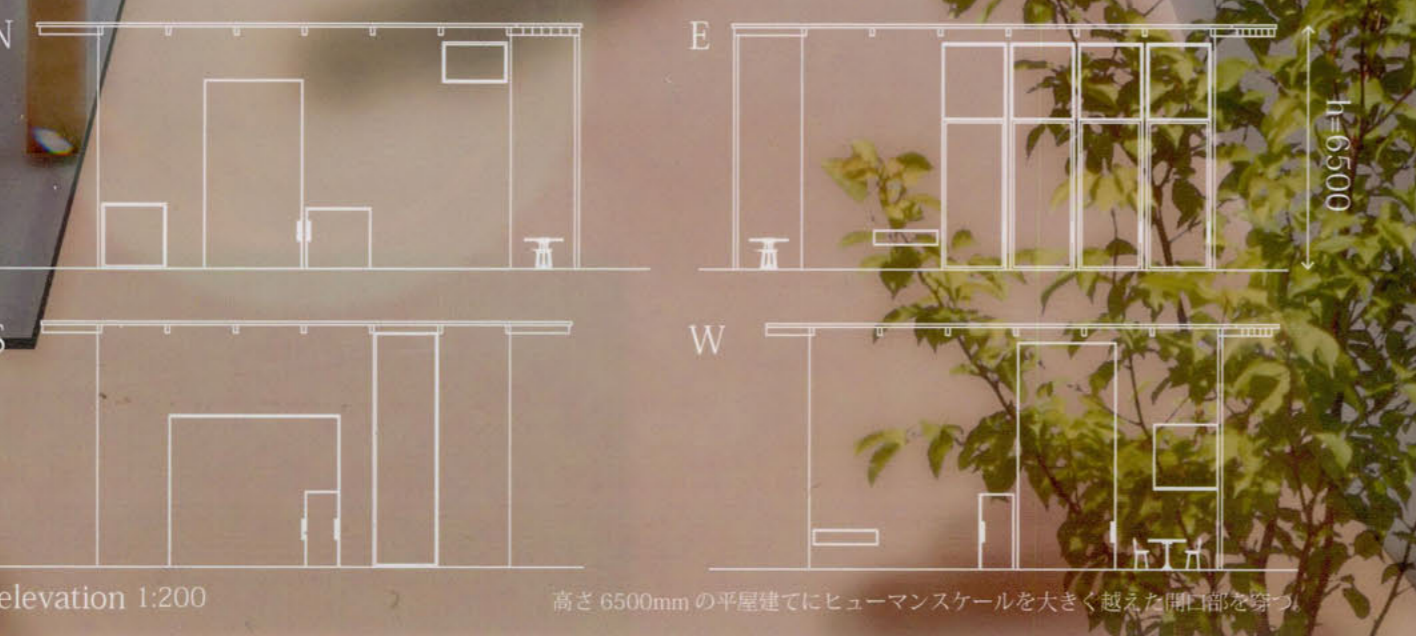


4000の高さでは人のスケールを大きく越える。内外の境界はよりゆるやかである。

風、におい・おと、視線・風景



トップライトからは自然光が降りそそぐ。軒の出かたを様々なすることで内外の距離感をなくす。



高さ6500mmの平屋建てにヒューマンスケールを大きく越えた開口部を穿つ。